

(16) 防災・安全教育研究会

会 長 今津 一志 (竹島小)
副会長 渡邊 章久 (中筋中)
事務局 村松 人巳 (下田小)

1. 研究主題 「僕も君も助かる、実践的防災・安全教育」

2. 研究経過

実施年月日	研究のあらまし	会場	備考
5月 8日 (水)	四万十市教育研究会 組織総会 内容：役員選出、研究主題設定、年間計画	中村南小学校	
8月20日 (火)	夏季研修会 ・講話・演習 「津波防災と学校教育との コラボレーションの可能性」 講師：杉山高志 (京都大学防災研究所)	中央公民館	31名参加
10月2日 (水)	教育研究大会 ・講話 「犠牲者ゼロを目指す 黒潮町の防災対策」 講師：徳廣誠司 (黒潮町役場情報防災課 課長) ・フィールドワーク (避難タワー等)	黒潮町役場	35名参加

3. 夏季研修会

1. 日 時 令和元年8月20日 (火) 13:30~16:45
2. 会 場 四万十市立中央公民館 2階研修室 I
3. 日 程
 - ・開会行事 (13:30~13:40)
 - ・講話・演習 (13:40~16:30)
 - ・閉会行事 (16:30~16:45)

4. 研修内容

- 講話 演題「津波防災と学校教育とのコラボレーションの可能性」
講師 杉山 高志 研究員 (京都大学防災研究所)

(1) 防災教育の課題の確認

3つの壁	解決の糸口
①防災と恐怖	<ul style="list-style-type: none"> ・「脅しの防災教育」ではなく、「姿勢の防災教育」を行うべき。(生徒が主体的に物事を考えるような防災教育が必要。) ・リスクの解決法も示した防災教育が必要。
②防災と教育効果	<ul style="list-style-type: none"> ・長期的な期間で防災に対する態度変容を検証することが必要。 ・小学生が同居する家庭は、そうでない家庭に比べて訓練参加率が高い、外部指標によって教育効果を検証することができる。 ・態度変容を数的な指標だけでなく、エスノグラフィックな質的なデータの変化によって測ることができる。
③防災と授業時間	<ul style="list-style-type: none"> ・通常教科の中に、防災教育を織り交ぜていく必要がある。 ・進路計画の中に、防災活動の必要性を見出す授業を展開できる。

(2) 防災教育の事例研究の検証

～防災教育の3つの壁を乗り越えるための手立て (黒潮町での事例より)～

- ①「逃げトレ」を使った防災授業例

- ②クロスロードを使った防災授業例
 - ③屋内避難訓練を使った防災授業例
 - ④「夢見る防災教育」を使った防災授業例
- (3) 防災教育のアイデアワークショップ
個人思考→グループ協議→発表

5. 参加者の感想（一部抜粋）

- ・震災の映像や写真を見せ、恐ろしさを伝えることが中心の防災教育になりがちだと思ったので、児童生徒が主体的に考え、行動できるような内容にしていかなければならないと思った。避難訓練は様々な場面を想定して行っているが、家に一人にいる時、遊びに行っている時などに発生したらどうすればいいのか自分で考え判断できるような指導の必要性を感じた。
- ・「逃げトレ」を活用した授業実践（失敗から学ぶ授業）を見て、避難訓練をやって終わりでは実践につなげることが難しいと分かった。失敗を経験させ、その原因を探ることでより実情に近い訓練ができ、学びを深めることができると思うので、失敗から学ぶ授業を展開し、より実際に生かせる防災教育をしていきたいと思った。
- ・災害に対する備えの一つとして、「クロスロード」を用いた話し合い（対話的）の授業をしてみたい。参観日等で保護者や地域の方々と一緒にやってみることで、地域の防災力の向上につながるのではないかと感じた。

4. 平成31（2019）年度四万十市教育研究会

1. 日時 令和元年10月2日（水）14:00～16:45
2. 会場 黒潮町役場 3階会議室
3. 日程
 - ・開会行事（14:00～14:10）
 - ・講話（14:10～15:00）
 - ・フィールドワーク（15:00～16:40）
[避難タワー見学（佐賀地区・浜の宮地区）]
 - ・閉会行事（16:40～16:45）



4. 研修内容

- 講話 演題「犠牲者ゼロを目指す 黒潮町の防災対策」
講師 徳廣 誠司 課長（黒潮町役場 情報防災課）

(1) 職員地域担当制

- ・黒潮町は新想定で町内61地区のうち、40地区が浸水区域とされている。広範囲なエリアで地震・津波対策を早期に実施していくためには、防災担当職員だけでは人員不足であったことから、役場の全職員が通常業務に加え防災業務を兼務することで必要となる体制を確保した。

- *全61集落での防災ワークショップ開催
- *避難場所・避難道の見直し・点検

(2) 避難空間の整備（平成30年度末で約9割の整備が完成）

- ◆津波避難タワーの整備
避難困難区域の解消を目的として、町内6地区（佐賀：2、大方：4）に建設。
- ◆その他の整備
備蓄倉庫（約120箇所のうち約100箇所を整備）
津波避難誘導標識（約900箇所を整備）

(3) 戸別津波避難カルテづくり

- ・津波浸水が予測される40地区全世帯の避難行動調査を実施し、カルテを収集。

(4) 地区防災計画

- ・地域住民が自らの命と地域を守り、自ら作成する地域特性を反映した防災計画。

〈町内における検討事例〉

- | | | |
|----------------|---------|---------------|
| ①車避難計画 | ②屋内避難訓練 | ③地区一斉家具固定 |
| ④避難場所への世帯毎備蓄 | | ⑤地区独自ルール看板作り |
| ⑥避難車両受け入れ計画 | | ⑦地区内防災情報チラシ発行 |
| ⑧地区内避難場所間の連絡手段 | | 等 |
- (5) 木造住宅耐震化等の促進
- (6) 応急期機能配置計画
- ・災害発生時～復興期の間となる応急期において必要となる各種機能を事前に町内施設等に配置しておく計画。
- (7) 避難所運営マニュアル作成
- ・地域の方や避難者が協力して避難所の運営を行うことができるよう、避難所毎に地区の代表者が集まり、マニュアルを作成。
- (8) 告知放送端末機→町内全家庭に整備
- (9) 町備蓄計画（町民の1日分にあたる食料及び水の備蓄を推進）
- ・町民に対して、3日間の個人備蓄を推進している。
- (10) 防災教育プログラム
- (11) 防災訓練の開催
- (12) 缶詰製作所

○フィールドワーク（避難タワー等）



5. 参加者の感想（一部抜粋）

- ・黒潮町の南海トラフ巨大地震新想定によるシミュレーション動画に強い危機感を覚えた。また、黒潮町における先進的な取組に「避難放棄者を出さない」という強い思いを感じた。
- ・避難タワーの見学は貴重な体験となった。建設の経緯（対応の素早さ）や、それに関わった方々の思いに触れ、タワーによって多くの人々の命を救うことができると感じた。また、避難タワーを開放していることで、住民がいつでも登ることができ、いざという時に慌てずにすむと思った。
- ・防災教育プログラム（町内小中学校9年間を見通した防災学習）を継続して取り組むことにより、それを受けた子どもたちが親となり、町を「防災文化」化していくという将来を見据えた取組に感銘を受けた。

5. 今年度の成果（○）と課題（●）

- 防災授業例を紹介していただいたことで、自校の避難訓練や防災教育等を見直すきっかけとなった。
- 黒潮町は、地域・行政・学校が一体となって取り組んでいる。犠牲者ゼロを目指す取組は、今後の学習に生かしていける内容だった。
- 児童生徒が主体的に考え判断できる力を付ける防災教育が必要である。
- 四万十市のシミュレーション動画等があれば、それを活用した研修が実施できるのではないかと。